

## 芥川龍之介「野呂松人形」

### \* あらすじ

主人公の友人Kの知人から、「野呂松人形を使うから、見に来ないか」と言う招待が来る。招待に応じる事にした主人公は、招待された家に到着する。他の客は全員、袴を着ているが、自分だけ洋服を着ていることに驚く。

Kが主人公に野呂松人形について詳しく語って来る一舞台の大きさ、人形の名称など。主人公は、「この簡素な舞台を見て非常にいい心もちがした」と言う。

狂言が始まり、ぼおっとして見ていると、主人公は「人形に対してétrangerの感を深くした。」と言う。そして、アナトール・フランスの書いた、次の一節を思い出す。

「――時代と場所との制限を離れた美は、どこにもない。  
あらゆる芸術の作品は、その製作の場所と時代とを知って、  
始めて、正当に愛し、かつ、理解し得られるのである。」

自分が書いている小説も、いつかこの野呂松人形のように、時代遅れになる時が来るのではないだろうか、と主人公は疑問を抱く。芸術家は誰も、時代と場所との制限をうけない美があると信じたがっている、が、果してそのようなものが存在するのか、と、主人公は疑う。

狂言が終わり、ぼんやり、独り煙草を吸っている場面で物語が終わる。

### \* テーマ

「美」の相対性：場所と時代の制限を受けない美は存在するのか。

### \* 注釈

- ・野呂松人形  
人形浄瑠璃の間狂言として演じられた道化人形。  
――昔のもの、時代遅れの芸術の象徴
- ・étranger (エトランゼ)  
外人・よそ者
- ・アナトール・フランス (Anatole France)  
フランスの詩人・小説家・批評家。  
ノーベル文学賞受賞

